# クリスマス・ソングを聞き、いのちについて考える

12月になると、あちこちでクリスマス・ソングが聞こえてきます。最近は、日本ではあまり知られていないような曲も流されるようになり、音楽が好きな私は、立ち止まって聞いたりすることもあります。

ご存じのように、クリスマスはイエス・キリストの誕生を祝うお祭りなので、クリスマス・ソングの中には、宗教的な内容を歌うものも少なくありません（余談ですが、有名な「きよしこの夜」の日本語詞を作った由木康は、関西学院の卒業生です）。そして、クリスマス・ソングは、今も新たに作られ続けています。

二〇世紀後半になって、キリスト教の賛美歌にも、新しい視点からクリスマスの意味を考えるものが作られるようになりました。「キリストは明日おいでになる」（『讃美歌21』二四四番）という賛美歌も、そうしたものの一つです。

その一節には、こう歌われています。

明日はみんなのクリスマスだ。
み神の愛の祝いの日だ。
救いの星は空に照るが、
世の人は主をかえりみない。

私たちのこの世界には、貧困や飢餓、戦争や災害のゆえに、その命が脅かされている子どもたちが多くいます。日本語詞では明示されていませんが、原詞では、こうした子どもたちのことを考えずにクリスマスを祝うのは、「主」＝イエス・キリストを「かえりみない」のと同じことだと歌っています。

サイモン&ガーファンクルの「七時のニュース／きよしこの夜」（一九六六年）という曲では、「きよしこの夜」の歌われるバックに七時のニュースが流れます。その中では、終わりの見えないベトナム戦争やアメリカにおける人種差別の現実、事件のニュースなどが語られています。この曲は、社会の問題と関係なくクリスマスをお祝いすることへの痛烈な批判となっていますが、同じ思いが、「キリストは明日おいでになる」にも歌われていると言っていいでしょう。

み子キリストはいつの世にも、
みどり子としておいでになる。

生まれ来る子どものいのちは、いずれも、キリストのいのちと同じ価値あるものです。ですから、キリストの誕生を祝うならば、すべての子どものいのちと将来に無関心ではいられません。クリスマスは、もっとも弱いいのちを尊重し、子どもたちが幸せに暮らせる世界を築くためにはどうすればいいか、考えを巡らせるときでもあるのです。

世界中の子どもたちが皆大切にされ、平和で安全に暮らすことができますように。そして、皆さんのクリスマスと新年が、平和で幸せなものでありますように。

**水野隆一**
関西学院大学神学部教授
神学部長

みずの・りゅういち
関西学院大学博士（神学）。専門は、ヘブライ語聖書学。ことに物語の文芸批評的解釈を中心に研究している。また、教会音楽、ことに賛美歌の翻訳、研究・普及にも力を入れている。関西学院大学大学院神学研究科博士課程前期課程、南メソジスト大学パーキンス神学院（アメリカ・テキサス州ダラス）修了。著書に『アブラハム物語を読む―文芸批評的アプローチ』（関西学院大学研究叢書一一五編。新教出版社、二〇〇六年）、関西学院大学キリスト教と文化研究センター編・栗林輝夫・樋口進監修『キリスト教平和学事典』（教文館、二〇〇九年、編集委員・執筆者）など。

世界市民を育む、学びがある。
関西学院大学
KWANSEI GAKUIN UNIVERSITY
〒662-8501 兵庫県西宮市上ケ原一番町1番155号
TEL:0798-54-6017 URL:http://www.kwansei.ac.jp/
125 関西学院 1889−2014